

の出来事を日記に記す女などが登場してくる。舞台は緊張と弛緩を繰り返す、過去、現在、未来という時間軸は自由に動かされる。さまざまな語りの芸を披露している。

一人の女だけに語らせていた Wilde の姿はもはや見られない。‘innocence’ な劇作家は「語りを知る」という ‘experience’ を通してその技を比類なきものにしたのである。「対話」する饒舌な女たちを描きえた時、Wilde は、「語りの喜劇」を確かに創り出したのである。

短篇『謎のないスフィンクス』論考

——「神秘」への誘いと言語操作について——

梅津義宣

(尚絅女学院短期大学助教授)

文学の世界について、特に「小説」のジャンルに関して、短篇の構成や文体が長篇のそれと根本的に異なっている点がある。それは、長篇の場合には、そのうちに読者の興味を惹くことができるが、短篇の場合は、いかにはやく読者の興味を惹くか、また、読者の興味をどこに集中させるかという点が重要な鍵となる。

ところで、ワイルドの芸術観を窺う上で重要な手掛となるキーワードは、「形式」「選択」「制約」「強調」「誇張」というような言葉である。これらのキーワードを基とするワイルドの作為性が、他のジャンルもさることながら、とりわけ彼の短篇を構成する上で効果的な支柱となっていることに注目したい。このような、ワイルドの短篇の劈頭から結末に到る完璧なほどの作為性を具備した言語操作を、「言葉（あるいは言葉の組み合わせ）を文学の根底に据えたエドガー・アラン・ポーの詩論（『構成の原理』等）」の影響と見ることは、ワイルドとポーとの関わりを深くたどれば自ずと明らかなことである。

力強いインパクトをもって読者を「神秘」の世界へと巧みに誘う言語操作を、ワイルドの代表的短篇の一つである『謎のないスフィンクス』を通して分析してみたいと思う。

まず注目すべき点は、本短篇の劈頭部分である。「エッチング（銅版画風に）」というサブタイトルがそれを示唆するように、書き出しの文章は、四つの「-ing形」が反復して用いられ、爽やかに流れるような文体で叙述される。セーヌ河畔に位置する喫茶店「平和」の外に腰をかけてベルモット酒を飲みながら眺める光景は、パリに住む人々の “the splendour and shabiness” であり、また “the strange panorama of pride and poverty” であって、これら二つの光景は互いに平衡の関係を形成している。またここで

は、/s/ と /ʃ/, /p/ 音が効果的に響き合っている。本短篇の劈頭部分、つまり、「私」と旧友マーチスンとの思いもかけぬ邂逅の場面は、音や形の多様な反復による「連想の網目の拡大」によって、神秘的な匂いを漂わせながら映し出されるのである——。オックスフォードの学生時代以来10年ぶりで出会ったマーチスンのただならぬ変貌ぶり。彼の変貌の原因は、告白によれば「謎の女」に魅了されたことによるものであった。ここからプロットは、マーチスンの告白の形で展開されてゆく。

大きな物憂い目、しなやかな髪、すんなりした背丈。名状しがたい麗しきでマーチスンの心を虜にした彼女は黄色の馬車を愛用している。ワイルドの他の作品に関しても言えることだが、本短篇でも、黄色は象徴性を帯びて使用されている。『ドリアン・グレイの肖像』『キャンタヴィルの幽霊』や詩『黄色のシンフォニー』などに描き出される黄色は、神秘性や世紀末の退廃、凋落、ひいては死を象徴する色調を帯びている。また『黄色のシンフォニー』に描かれる黄色は「落葉直前の熟しきった様相」をも象徴している。このように考えると、本短篇の「謎の女」は神秘に満ちた女であると同時に、熟しきった女であり、その背後には死が見え隠れする。

「謎の女」のマーチスンに対する言動は奇妙であり、神秘的ですらある。あるパーティーの席で彼が声をかけると、彼女の口からは“Pray do not talk so loud; you may be overheard.”という答が返ってきたり、彼が約束の時間に彼女宅を訪ねると本人は不在であったりする。彼女に手紙を書けば、“Please do not write to me here again...”という訳の分からぬ返事が届く始末。下町の下宿屋らしき所にペールを深々と下げ、急ぎ足で入ってゆく彼女の姿を発見した彼は、陰に「男」がいると読んで詰問するが、断固として彼女はそれを否定する。

やがてマーチスは新聞によって「謎の女」、アルロイ夫人の急死の事実を知ることになるが、この場面は、暗鬱な空気を醸し出す夥しい/d/音の反復によって彼女の死を悼む彼の心の疼きが増幅されて描き出されている。

ところで、本短篇は「私」とマーチスンとの間で交わされる次の対話で終結する。

「なぜ夫人はあの下宿屋にでかけたのだろうか」と彼が問う。「夫人はただの秘密マニアだったのだよ。…つまり『秘密のないスフィンクス』にすぎなかったのだ」と「私」が答える。「果たしてそうだろうか」と彼——。

このような結末に読者は突き放されたような戸惑いを感ずる。と同時に、張りつめた心の糸がプツンと切られたような空しい余白の中に、一種の哀感のようなもの、それでいて何か透明で美しいものを感じるのである。

ワイルドは、巧緻な言語操作によって、読者を思うままに「神秘」の世界に誘うことに首尾よく成功しているのである。